

過去七仏が悟りをひらいた木

サーンチー編

井 上 綾 瀬

0. はじめに

各種の仏典において、ゴータマ仏以前にも幾人もの仏が現れ仏法を説いたと言われる。その仏達は、ゴータマ仏も含め七仏であったと語られる。各種の仏典の中で各々の仏は、樹下に座して禪定し悟りをひらくと伝えられている。筆者は、「過去七仏が悟りをひらいた木」と題してテキスト研究による過去七仏の菩提樹の同定を行った。その際、*Dīgha-Nikāya*、『長阿含経』、『大本経』、『増一阿含経』、『仏名経』、『七佛父母姓字経』、『孔雀王呪経』、及び、DN の注釈書である *Mahāpadānasuttanta-aṭṭhakathā* を使用し同定に至った（拙稿 [2009]）。同稿は、菩提樹に関する清水 [2002] や丹 [1969] の先行研究、植物学の視点から菩提樹の同定を行った満久 [1996] の研究に加え、現代インドのアーユルヴェーダ研究を参考に筆者が改めて植物の同定を試みたものである。その中で、ヴェッサブー仏、カクサンダ仏、コーナーマガナ仏、カッサパ仏、ゴータマ仏の菩提樹に関しては各テキストに矛盾なく同定に至った。しかし、ウィパッシー仏、シキー仏の菩提樹については、各テキストに相違がありテキスト研究だけでは結論を得ることはできなかった。

このようにテキストのみに頼った研究では限界があるため、本稿では、仏教遺跡であるサーンチーにおいて造形化された過去七仏の作例を取り上げ、過去七仏の菩提樹について検討を試みる。インドにおける過去七仏の作例は、前2世紀から後1世紀の遺跡ではパールフット及び、サーンチー、クシャーン時代のガンダーラやマトゥラーにあり、さらに5世紀以降に開鑿されたアジャンター後期石窟に見受けられる。周知のごとく、クシャーン時代における仏陀像の誕生をみる以前、すなわち、前2世紀から後1世紀の時代においては、仏は菩提樹や仏塔、法輪、仏足跡など象徴表現によってその存在や行為が示され、特に過去七仏は一般に菩提樹と仏塔で表現される（肥塚・宮治 [2000]）。パールフットの菩提樹の浮彫は、過去仏の名前を記した碑文を伴い^①、過去仏自体の同定が容易であるものの、作例が全5点と僅かで一連の過去七仏とい

う形式では遺例がない。一方、サーンチーの浮彫は、過去七仏が並ぶ作例が6点を数え、個々の過去仏の作例数も42点にのぼる。サーンチーの過去七仏は、菩提樹、すなわち樹木と仏塔で表されており、上記の42点中、樹木の作例は26点である。パールフットの5点と比べ、豊富な作例を有する。そのため、本稿では、サーンチーの過去七仏を検討することにした。

さて、本稿で取り上げるサーンチー第1塔の塔門には、過去七仏の礼拝場面を示すと考えられる作例が6点存在する。東西南北の各塔門に1つ、或は、2つずつ浮彫されている。これらは、A. フーシェによって過去七仏に同定され^②、その後の研究者もフーシェの見解に追従している。フーシェ、J. マーシャルによる *The Monuments of Sāñchi* の出版以来、多くのサーンチーに関する研究がなされてきた。しかし、各過去七仏の浮彫を個々に調査した研究は未だみられない。樹木等の意匠を扱った研究は、林 [1992] に部分的に触れられているが、樹木の浮彫について厳密に精査し同定に至るものではなく、インドの遺跡に残る装飾文様を系統的に研究したものである。

現在の研究の動向は、テキストから遺跡の内容を解明する研究がさかんである。しかし、反対に遺跡に残る作例から樹木の種類を特定し、テキストに反映させる研究は皆無である。古代インド人が把握していた樹木とその個々の特徴よりテキストから同定が困難な植物の同定につなげたいと考える。サーンチー第1塔門横梁の過去七仏と同定されている浮彫は、樹木が様々な特徴をもって表現されているが、礼拝者を伴うことから、一部の例外を除き、どの樹木の表現もまとめて「菩提樹の礼拝」という名称で解されている。

これらを踏まえ、本稿では、まず、拙稿 [2009] の結果からサーンチー第1塔の塔門にみられる過去七仏とされる浮彫^④の同定を試みる。テキストから判明した樹木の特徴と、浮彫の特徴を比較対照し、符合した浮彫がどの過去仏の菩提樹を示し、どのような植物であるのか整理する。次に、造形作例から拙稿 [2009] だけでは同定しきれなかった、シキー仏とヴィパッシー仏の菩提樹について検討を行う。その後、両者の結果から、サーンチー第1塔の過去七仏の全体像を検討する。加えて、テキスト研究で使った文献や、アジャンターの後期石窟（5世紀中頃以降）^⑤の壁画遺例では、ヴィパッシー仏からゴータマ仏へと時間軸にそって記されるが、このことが、サーンチーにも適用できるか否かを考察する。

1. 第1塔の過去七仏浮彫と生木の様相

1.1. 南門

4つの塔門のうち、最古とされる南門では、第1横梁背面に過去七仏の浮彫がみられる（図1）。以下、この作例の画面向かって左から順に仮番号を振り、考察を進める^⑥。南門の作例では、仏塔と樹木が配されるが、それぞれに姿態の異なる礼拝者が傍らに表されている。ここで

は象徴表現として仏塔3基と樹木4基が交互に配され、その合計7基によって過去七仏を表現している。後述する南門以外の作例と異なり、合掌せず供物を携える人物像、傘蓋を伴わない樹木もみえる。

まず、はじめに、画面右端の樹木は、筋の入った幹に楕円形の複葉を持つ樹木が聖壇上に配され、樹木の向って左側に仏子を持った女性と樹木を見上げる男児が表される(図1(1))。樹木の特徴から、カクサンダ仏の菩提樹であるマメ科ネムノキ属ビルマネムノキが一致する^⑦。楕円形の複葉という特徴からマメ科の植物を表現した可能性が高い。

次に画面中央の仏塔の左に配された樹木は、幹に果実が実り、先端の細くなった尖った葉を持つ樹木が聖壇に配されている(図1(3))。これは、(1)と同様に傘蓋は確認できないが、左側に仏子を持った女性と左手を屈臂して供物をもつ女児が確認できる。幹に果実が実る樹木は珍しくテキストから同定した過去七仏の菩提樹にも1例しかみられないことから、コーナーマガナ仏の菩提樹であるクワ科イチジク属フサナリイチジクに相違ない。

また、画面中央の仏塔の右に配された樹木は、湾曲した筋の入った幹に、丸みの強い楕円形でかつ先端の尖った葉を持ち、枝から根の伸びた樹木が聖壇に配される(図1(5))。この浮彫に付随するような人物は看取できない。樹木の表現から、カッサバ仏の菩提樹であるクワ科イチジク属パニヤンが相当する。サーンチー第1塔では、象群の菩提樹供養(図2)にみられるように根が枝や幹から下方へ伸び広がり特徴を備えたパニヤンの表現がみられ、明らかに特定の樹木を意識的に描き分けているように思われる。厳密には、先にみた図1(1)も図様としては幹に筋がはいるが、パニヤンには複葉の特徴がないために該当しないといえる。

最後に、画面左端の樹木について確認する(図1(7))。この樹木は、葉がハート形を逆さにした形を呈しており、湾曲した枝振りである。浮彫下部が破損し、完全な形を確認できないものの、当初は先の2種の樹木と同様に聖壇上に配されていたと推測できる。また、南門横梁の樹木の浮彫のなかでは傘蓋を備えた唯一の作例である^⑧。葉の様相からゴータマ仏の菩提樹であるクワ科イチジク属インドボダイジュ、或は、フタバガキ科サラノキ属サラノキが浮かぶ。サラノキは、波を打った楕円の形状で先端の尖った馬耳のような形の葉をもつ。ただし、サラノキの葉は、インドボダイジュの葉ほど顕著に尖っていない。また、湾曲した枝振りもその特徴として挙げられる。よって、サラノキ、インドボダイジュともにその特徴は、酷似している。そこで、ボードガヤー大精舎参拝(図3)にみる樹木の様相と比較すると、周知のようにボードガヤーはゴータマが成道した地であるから、図3にみる樹木はインドボダイジュに他ならず、ここでは先端の鋭く尖った葉と左右上方に伸びる枝がみえる。この特徴は、図1(7)と同様のものである。

1.2.北門

北門には、横梁の突出部を含め第1横梁、及び、第2横梁に過去七仏の浮彫が確認できる^⑨。北門では、すべての樹木が上方に傘蓋、下方に聖壇を伴う。

第1横梁では、南門と異なり樹木の浮彫2基と仏塔の浮彫5基で構成される。樹木の浮彫がそれぞれ異なる樹木を示すことは明瞭であるが、実際の樹木の特徴を明確に捉えた浮彫ではないため同定が難しい。

まず、各樹木の図様を確認すると、画面中央の仏塔に向かって右に配された樹木は、丸みを帯びた葉をもち、幹が短く根元から放射線状に伸びる枝を有し、果実の表現はみられない(図4(3))。丸みを帯びた葉という点は、七仏の菩提樹の中にはビルマネムノキしか存在しない。しかし、ビルマネムノキは複葉の特徴を備えており、図4(3)の浮彫にはその特徴が見出せない上に、南門とも表現が異なるため、ここでは断定を避けたい。画面中央の仏塔に向かって左に配された樹木は、細長く先端の尖った葉をもち、上方へ伸びる幹と垂れ下がる幹をもつ(図4(5))。この樹木にも果実はみられない。およそ一般的な樹木の生木は、この図4(5)のように葉と枝、幹をもつため、テキストから同定した七仏の菩提樹の一種として表現されているのか、また別の聖なる樹木を表現しているのか判然としない。

第2横梁の作例は、7基の樹木によって七仏が構成される例である。7基の樹木は、特徴の顕著なものもあるが、浮彫だけでは判別し難いものもある。図5以降は、より細部を詳しく確認できるように横梁部の各樹木に一図ずつ掲載した。これらは、図4と同様に左横梁突出部、横梁中心部、右横梁突出部へと左から右へ順に対応し、括弧内の数字もそれに準じている。

まず本来ならば画面左端に配される図5(1)の樹木は、球の形状を持つ物の下に柳のように垂れ下がる葉をもつ。これは、ヴィパッサナー仏の菩提樹の特徴である。しかし、テキスト研究でヴィパッサナー仏の菩提樹については問題が残っており、同定に至っていないため、改めて後述する。画面左端から2番目に位置する樹木は、根元から放射状に伸びる枝振り、丸みを帯びた葉をもち、果実はみられない(図6(2))。樹木の傍らで女性が水差しを差し伸べている。南門(図4(3))でみたようにビルマネムノキの可能性はある。しかし、南門のように複葉の特徴はみられないため、断定は避けたい。続く画面左端から3番目の樹木の表現は、葉、枝ともに数が少なく、他の樹木と比べても特徴が捉え難い(図7(3))。葉の先端は丸まっていないということが分かるのでビルマネムノキの可能性はないといえる。画面中央に位置する樹木は、幹に筋が入った樹木であり、南門(図1(5))で確認したようにパニヤンを表現していると考えられる(図8(4))。また、画面中央の樹木の右側に位置する樹木は、幹に果実が実っており、その果実が房のように集まっていることから、南門(図1(3))の作例とも共通の表現がみられフサナリイチジクの特徴を捉えている(図9(5))。続く右側の樹木は、

樹木全体が丸みを帯びており、幹が短く枝が茂っている。葉は、長楕円の先が少し尖っており上方を向いている（図10(6)）。画面最右端に位置する樹木は、放射状に枝が広がり、先端が鋭く尖った葉をもつ。葉は上方を向いているものと下方を向いているものが混在している（図11(7)）。図3の仏陀伽耶における成道の場面でみたゴータマの菩提樹や南門（図1(7)）と極めて類似している。よって、この先端の鋭く尖った葉と左右上方へ伸びる枝をもつ樹木がインドボダイジュであることは明白である。

2.3. 東門

以上を踏まえ、東門に目を転じる。東門の作例は正面に1例、背面に1例、計2例あり、北門と同様に、1例は樹木2基と仏塔5基で構成され、もう1例は樹木7基で構成される。東門の過去七仏の浮彫は、第1横梁に背中合わせに正面と背面に配置されているのが特徴となる。東門の樹木も南門、北門同様に一連の樹木の中に同じ特徴を備えた樹木の浮彫はなく、明らかに樹木を描き分け表現しているのが分かる。特徴は以下の通りである。

図13は、第1横梁正面の画面中央部である。中央の仏塔に向かって左の樹木（図13(3)）は、先端が鋭く尖った葉をもつ樹木であり、幹から枝が上方に伸びている。これまでみてきた上で検討してきた例から、この表現上の特徴はインドボダイジュであることを示している。中央の仏塔に向かって右に位置する図13(5)は、球の形状を持つ物の下に葉が何枚も垂れ下がっている。先ほど北門で確認した例と同じ特徴を呈しており、同じ樹木を表したものであろう。

次に、東門裏面の作例についてみると、左端の樹木から順に、先端が尖り直線的に伸びる枝振りの樹木（図14(1)）、幹に果実が実る樹木（図15(2)）、先端が尖り、湾曲しながら伸びる枝をもち、枝の先端に丸い果実を持つ樹木（図16(3)）が看取できる。続く樹木は、複数の幹が集合し、幹に筋が入り生命力が豊かな樹であることを窺わせ（図17(4)）、楕円形の葉をもち枝が茂る様子が見られ（図18(5)）、先端がすこし尖った長楕円形の葉を持つ樹木（図19(6)）である。画面最右端に位置する樹木は、球の形状を持つ物と下垂する葉が特徴的である（図20(7)）。

2.4. 西門

先行研究において4つの塔門のうち最後に制作されたとされる西門においては、過去七仏の浮彫が樹木4基、仏塔3基で構成されている。西門第1横梁正面の左の突出部にあたる図21(1)は、本稿で問題とする作例の中で唯一の開敷の花が確認できる作例である。これは、花の下に下垂する葉をもつ表現をとっている。画面左側から3番目に位置する樹木は、幹に筋が入り、西門の図2「象群礼拝」と同様に幹の中間あたりから根が生えている様子がわかる

(図22(3))。画面中央に配置される樹木は、放射状に伸びる枝に先端の鋭く尖った葉が茂る(図23(5))。画面右端であり、右の突出部にある樹木は、丸みを帯びた葉が複葉のようにも見えるが、枝の先端の葉の様子が確認できないために断定ができない(図24(7))。幹や枝は大木のようにもある。

2.5. 浮彫にみる樹木の図像的特徴

以上、南門から順に樹木の図像的特徴と菩提樹の生木の特徴を比較対照し、同定を試みた。その結果、サーンチー第1塔の塔門にある過去七仏の作例には、様々な特徴をもつ浮彫があり、同じ特徴をもつ浮彫も複数存在することが分かった。同様の特徴が見受けられた樹木の形態は、「幹に果実が実る」、「幹に筋がある」、「先端が鋭く尖った葉をもち枝が直線に伸びる」、「尖った葉をもち枝が歪曲する」、「球の形態を持つ物や花に下垂する葉がつく」の5つである。しかし、過去七仏を表す一連の作例の中に同じ特徴をもつ図像はなく、それぞれ異なる特徴をもつ表現を呈していた。これは、サーンチー第1塔の塔門にみられる過去七仏の作例では、過去七仏がそれぞれ別の図像で表されるべきだと考えられていたことを示すものといえる。当然のことながら、一連の作例中に同じ菩提樹を用いると同じ仏を示すことになり、個々に異なる存在である七仏を表現するのに不都合を生じることとなる。このことは、過去七仏にそれぞれ異なる菩提樹を想定するテキストの内容とも符合する。

しかし、その一方で浮彫の中には、特徴が明確でないものも存在する。これらに関しては、周囲の同定可能な樹木から消去法により残った種類の菩提樹から近似するものを検討する方法も考えうるが、作例のなかには仏塔が混在しているためやや困難である。

3. 菩提樹の実体と浮彫にみる樹木の同定

2. の考察を踏まえ、樹木と浮彫をここで整理する。拙稿[2009]においてテキストから樹木を同定した内容は以下の通りである。ヴィパッシー仏がテリハボク、チョウセンアサガオ、ムユウジュ、クビナガタマバナノキのいずれか、シキー仏がニオイマンゴー、ヴェッサブー仏がサラノキ、カクサンダ仏がビルマネムノキ、コーナーガマナ仏がフサナリイチジク、カッサパ仏がバニヤン、ゴータマ仏がインドボダイジュである。

3.1. テキスト研究で同定可能な樹木

特徴が顕著な樹木は、コーナーガマナ仏のフサナリイチジク、カッサパ仏のバニヤンである。前述のとおり、フサナリイチジクは幹に果実が生育し、バニヤンは枝から根が下垂して大木となり、1本のバニヤンでも木々が集合した様相をみせる。次に特徴が顕著な植物は、複葉の大

木になるカクサンダ仏のビルマネムノキである。複葉の特徴をもつ植物は、過去七仏の菩提樹である可能性のある樹木のうち、この1種のみである。

この3種に関して、サーンチー第1塔の浮彫について植物の実体的特徴を合わせて同定出来るものは以下の通りである。

フサナリイチジク→図1(3)、図9(5)、図15(2)

パニヤン→図1(5)、図8(4)、図17(4)、図22(3)

ビルマネムノキ→図1(1)

次に、図3の仏陀伽耶の作例を参考に、ゴータマ仏の菩提樹であるインドボダイジュを同定したが、サーンチーでは、明らかにインドボダイジュとみられる図3の仏陀伽耶の作例と共通する植物が過去七仏の浮彫の中に何度も表現されている。この点から、サーンチーの工人がインドボダイジュの樹木の表現を描き分けていることは明らかである。インドボダイジュは、直線的な枝振りと、先端の鋭く尖ったハート形を逆さにしたような葉をもつことが特徴である。

インドボダイジュ→図1(7)、図11(7)、図13(3)、図14(1)、図23(5)

次にヴェッサパー仏のサラノキについてみると、インドボダイジュと同様に先端が尖った葉をもつが、インドボダイジュのそれほど尖らず、葉全体の形は馬の耳に似ている。枝振りもインドボダイジュの枝のように直線的ではない。サーンチー第1塔の過去七仏の浮彫の中では、以下が挙げられる。

サラノキ→図10(6)、図16(3)

他にも直線的な枝振りではなく、先端が尖った葉をもつ浮彫は確認できるが、顕著な特徴がないため断定は避ける。

3.2. テキスト研究において根拠の稀薄な樹木

さて、先述の拙稿[2009]では、シキー仏の菩提樹についてある仮説を立てた。経蔵の記述では「ハス」となる植物を注釈書によって「マンゴー」と読んだ。この仮説についてサーンチーの作例から確認したい。これまでみてきたように過去七仏の作例において、「ハス」の作例はなく、池や沼を示すような表現はみられなかった。このことから、サーンチー近辺に暮らしたインド人が考えたシキー仏の菩提樹は、草本ではなく木本であったと考えられる。

実際、マンゴーの樹木とニオイマンゴーの樹木の特徴は、近似しており、素人には果実が実るまで見分けられない。双方共に、大木に成長し深い緑色の光沢のある葉が多く茂る。サーンチーにはマンゴーを表現した例は数多くみられる。ここでは、西門門柱の内側面に表された守門神(ヤクシャ)を例に挙げてみよう(図12)。これは、守門像の背景にあるマンゴーの浮彫である。マンゴーの浮彫は、まとまって縦に並んだ長楕円形の葉の下に果実がある。これは、各

門柱の第三横梁下方の持送り部分においてヤクシーが手にしているマンゴーの表現と共通した図像的特徴である。以上、明らかにマンゴーを表現した作例と比較すると、過去七仏の浮彫の中にはマンゴーの作例がみられないこととなる。マンゴーとニオイマンゴーの生木は酷似しつつも、過去七仏の浮彫の中で変化をつけたという理由も考えられるが、いずれにしてもテキスト研究とサーンチーの浮彫の検討のみでは未だ答えがでない。シキー仏の菩提樹に関しては、他の作例についても今後検討の余地があろう。

さて、図5(1)の説明で先送りにしたゴツゴツした円形状の形態とそれに下垂する葉をもつ樹木について検討したい。図5(1)と同様の作例は、図13(5)、図20(7)、図21(1)である。先述したように、これはヴィパッシー仏の菩提樹であると考えられる。なぜならば、コーナーマガナ仏のフサナリイチジクや、カッサパ仏のバナヤン、カクサング仏のビルマネムノキは顕著な特徴をもち、既にサーンチーの浮彫においても明確に同定できた。また、葉の特徴が似ているゴータマ仏のインドボダイジュとウェッサブー仏のサラノキに関しても作例を検討することで同定に至った。これら5種の菩提樹は、テキスト研究でも各経典の記述が一致しており問題のなかった樹木である。さらに、シキー仏の菩提樹の可能性のあるニオイマンゴーについても検討したため、残るはヴィパッシー仏の菩提樹のみである。ヴィパッシー仏の菩提樹は、テキスト研究からも同定に至っておらず問題が残っている。

ヴィパッシー仏の菩提樹である可能性がある樹木は、テリハボク、チョウセンアサガオ、ムユウジュ、クビナガタマバナノキである。テリハボクは、白いウメのような花をつけ球形の果実を実らせる。食用にもなる果実だが、採取せずに果実が地面に落ちるまで放置するとごつごつした果実になる。チョウセンアサガオは、ラッパのような形の花を咲かせ、刺のはえた球形の子房を成長させる。しかし、果実が完熟すると種を放出するために弾けて裂ける。また、チョウセンアサガオは一年草であるため、大木には育たない。ムユウジュは、罌が花のように見える小花をアジサイのように群生させ雌蕊が長く伸びている。果実はマメ科なので細長い鞘に入った種が実る。クビナガタマバナノキは、細長い小花がキクのように集まり球形をなした花をもち、表面がでこぼこした球状の果実を実らせる。

サーンチーの過去七仏の浮彫のなかでヴィパッシー仏の可能性のある表現は、いずれの表現も「円形状の形態」と「花」の下に下垂する葉をもつ。以上のことから、「球形」に焦点を当てると、テリハボクの果実、ムユウジュの花、クビナガタマバナノキの花と果実が相当すると考えられる。西門の図21の「花」に焦点を当てると群集しないテリハボクの花が相当すると考えられる。しかし、以上の3種の植物は、ヤナギのように明らかに下垂する葉をもたず、完全に浮彫と合致する訳ではない。南門を除く塔門の過去七仏の浮彫では、植物に対して人物が小さく描かれており、個々の菩提樹は大木であると推測でき、チョウセンアサガオは大木に育た

ないため、サーンチー第1塔の過去七仏の浮彫には該当しないといえよう。また、大木に育たないという点は、樹下で禪定し仏になるという菩提樹の役目も果たさないため、菩提樹として適当ではないと言える。以上のことより、ヴィパッシー仏の菩提樹は、サーンチー第1塔の過去七仏の浮彫も考慮に入れ、テリハボク、ムユウジュ、クビナガタマバナノキに絞ることができる。

4. 時間軸の問題

サーンチー以降、過去七仏が樹木あるいは樹木を伴って造形化されるには、アジャンター後期石窟（5世紀中頃以降）を俟たなければならない。アジャンターでは過去七仏が併置されて示される場合、一部例外はあるが、時間軸に沿って古い順に画面向かって左から右へ並べられることが多い。過去七仏に並んで弥勒菩薩が示される場合も多くみられる。また、Dīgha-Nikāya、『長阿含経』『大本経』、『増一阿含経』、『仏名経』、『七佛父母姓字経』、『孔雀王呪経』でも古い過去仏から順に語られる。

しかし、サーンチー第1塔において過去七仏とされる浮彫は、既に見たように決して時間軸に基づいて並んでいない。しかし、サーンチーの浮彫彫刻の特徴として、一場面のなかに、或は、同じ区画のなかに、異なる時間でありながら同じ場所で起こった諸場面がいくつも併存して配されることもあるため、時間軸に必ずしも沿う必要性がなかったのかもしれない。

さらに、過去七仏の浮彫には、樹木のみの表現だけではなく、樹木と仏塔が混在した作例もあり、過去七仏の並び方は曖昧である。仏塔に明確な相違はなく、どの仏塔がどのブツダを示すものか不明である。以下に、上で検討したサーンチー塔門の過去七仏の配置を示した。数字は、テキストに則り、出現した順にヴィパッサナー仏を①とし、ゴータマ仏を⑦とした。また、「一」は仏塔による浮彫表現で樹木でないことを示し、「不明」は、特定できない樹木浮彫があることを示した。

表にみるように、七仏が右からも左からも順に並んでおらず、統一はとられていない。これ

場 所	樹木のレリーフの位置						
南門第1横梁背面	④	—	⑤	—	⑥	—	⑦
北門第1横梁正面	—	—	不明	—	不明	—	—
北門第2横梁正面	①	不明	不明	⑥	⑤	③	⑦
東門第1横梁正面	—	—	⑦	—	①	—	—
東門第1横梁背面	⑦	⑤	③	⑥	不明	不明	①
西門第1横梁正面	①	—	⑥	—	⑦	—	不明

は、時間軸を念頭に置いていなかったか、この時点では過去七仏の菩提樹が確定しておらずそれぞれ不特定の樹木を配することで過去七仏を記した可能性も考えられる。しかし、これまでみてきたようにいくつかの浮彫の作例は、似通っており樹木の種類が限定されていた可能性も指摘できよう。

なかでもゴータマ仏の菩提樹であるインドボダイジュは、北門第1横梁正面の不明瞭な作例を除いてすべての作例に含まれ、表現が共通していることから、サーンチー第1塔の時代から聖樹、或は、特別な樹木として考えられていたことが推測できる。

6. おわりに

サーンチー第1塔の塔門にみられる過去七仏を表す樹木の浮彫の図様をまとめると、複数の作例に共通する特徴として「幹に果実が実る」、「幹に筋がある」、「先端が鋭く尖った葉をもち枝が直線に伸びる」、「尖った葉をもち枝が歪曲する」、「円形状のものや花に下垂する葉がつく」の5つが確認できた。また、複数例はないが「複葉」の特徴をもつ浮彫も確認できた。これらの特徴を拙稿[2009]で確認した各植物の生木の特徴と照合すると「幹に果実が実る→フサナリイチジク」、「幹に筋がある→バニヤン」、「先端が鋭く尖った葉をもち枝が直線に伸びる→インドボダイジュ」、「尖った葉をもち枝が歪曲する→サラノキ」、「球の形状を持つ物や花に下垂する葉がつく→ヴィパッシー仏の菩提樹」、「複葉→ビルマネムノキ」に同定することができた。

拙稿[2009]で注釈書によって「ニオイマンゴー」がシキー仏の菩提樹だと仮定したが、サーンチー第1塔の過去七仏の浮彫の特徴に「マンゴー」を表現する浮彫はなかった。同様に、シキー仏の菩提樹について経蔵が述べる「ハス」のような草本も見出せなかった。そのため、「ニオイマンゴー」とも「ハス」とも同定が出来なかったが、サーンチー第1塔の過去七仏の浮彫では、樹下に座せる様な樹木の形態が表現されており、敢えていずれかとすれば、経蔵に記される「ハス」よりも、注釈書に記される「ニオイマンゴー」が菩提樹として可能性が見出せよう。また、ヴィパッシー仏の菩提樹に関しては、拙稿[2009]では4種の候補を挙げたが、サーンチー第1塔の過去七仏の浮彫の特徴により、テリハボク、ムユウジュ、クビナガタマバナノキの3種に絞ることができた。

本研究は、テキストでは判明しない点を制作時期の特定できる造形作例から補完しようと試みたものであるが、現存するテキストとサーンチーの作品には合致しないところも見受けられた。その理由としては、現存するテキストが後代のものである可能性、過去仏に関する考え方が現存するテキストの形になっていなかった可能性、サーンチーではまだ菩提樹が確定していなかった可能性などが考えられるが、特定は出来ない。また、サーンチーの過去七仏とされる

作例が、アジャンターのように現存するテキストと同様に古い過去仏から順に並べようとはしない特徴をもつことも同定を困難にしている一因である。しかし、ゴータマ仏のインドボディジュについては一定した特徴を示し、その他、特徴の一致する浮彫が各作例から複数確認できたことからわかるように、これらの植物については特定の図像的特徴を以て意図的に描き分けており、過去仏と特定の樹木が結びつける発想は造形作例の上ではサーンチー第1塔の時代、紀元後1世紀から見受けられることは明らかである。

参考文献

- Sir John Marshall and Alfred Foucher, *The Monuments of śāñchī*, 1940
 安藤佳香 「インドグプタ期の蓮華系植物表現について」『仏教学会紀要』5、1997
 伊藤照司、沖守弘『原始仏教美術図典』雄山閣出版、1991（伊藤、沖 [1991]）
 井上綾瀬 「過去七仏が悟りをひらいた木」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』31、2009（拙稿 [2009]）
 岡田栄照 「蓮華について」『大崎学報』122、1967
 片山一良 「長部」パーリ仏典第2期3、大蔵出版、2004（片山 [2004]）
 「仏典の植物」八坂書房、1995（片山 [1995]）
 金沢 篤 「如意樹 インド植物考序説」『東方』2、1986（金沢 [1986]）
 木村秀雄 「SAundaranandaにおける植物文学」『日本仏教学会年報』25、1960（木村 [1960]）
 肥塚隆、宮治昭『世界美術大全集 東洋編13 インド（1）』小学館、2000（肥塚、宮治 [2000]）
 静谷正雄 「インド仏教碑銘目録」平楽寺書店、1979（静谷 [1979]）
 清水洋平 「過去七仏の菩提樹について」『大谷大学大学院研究紀要』、2002（清水 [2002]）
 丹信 實 「釈迦牟尼仏に因縁のある印度の植物に就いて」『龍谷大学論集』龍谷学会、1969（丹 [1969]）
 塚本啓祥 「インド仏教碑銘の研究」Ⅰ、平楽寺書店、1996（塚本 [1996]）
 中村元監修 「ジャータカ全集」、春秋社、1982-1991
 西岡直樹 「インド花綴り」木犀社、2002（西岡 [2002]）
 林 一良 「東洋美術の装飾文様」同朋舎出版、1992（林 [1992]）
 東元多郎 「阿舎に見える蓮華について」『日本仏教学会年報』15、1950（東元 [1950]）
 満久崇磨 「仏典の木」『木材研究資料32』京都大学木材研究所1996（満久 [1996]）
 「仏典の木」『木材研究資料33』京都大学木材研究所1997（満久 [1997]）

註

- ① 塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究』全3巻、静谷正雄『インド仏教碑銘目録』
- ② *The monuments of Śāñchī* 第2巻
- ③ *The monuments of Śāñchī*, VOL.2参照。南門正面西柱や南柱などにある「菩提樹の礼拝」と題される浮彫では、ゴータマ仏やヴィパッシン仏の礼拝と同定されるものもある。
- ④ 主に考古学、美術史学の先行研究の成果を踏まえる。特に *The monuments of Śāñchī* を使用する。
- ⑤ アジャンターの過去七仏の作例は、いずれも弥勒菩薩を含み1セットとして扱う。
- ⑥ サーンチーでは、統一した番号が付けられず、作品が位置する場所でその作品が呼ばれる。南門の過去七仏を例にとると「南門第1横梁背面」となる。本論文では、便宜上「南門第1横梁背

面」を7作の作品に分け、作品に向かって左から仮番号を振ることとした。南門以外の作例は、左右の横梁突出部を含んで過去七仏の浮彫となる。そのため突出部を含み左から仮番号を振ることとする。

- ⑦ テキストから同定した過去七仏の菩提樹の可能性のある植物のうちマメ科の植物は、カクサンダ仏のビルマネムノキと、ヴィパッシー仏のムユウジュがある。しかし、ヴィパッシー仏の菩提樹は、*The Monuments of Sāñchi* の中でもたびたび取り上げられるが形が異なる。
- ⑧ 南門の仏塔の作例は、すべて傘蓋を備える。
- ⑨ 東門、西門も同様の形態をとり、方形門柱を挟んで左右の突出部を含み七仏になる。図6以降の図示資料は、左から順に仮番号を設け仏塔を挙げない。個々の樹木のみ取り上げる。
- ⑩ 傘蓋を讃えた樹木で表現されるため、何らかの聖樹と考えられる。仏典に散見できる樹木の他にも、インドでは、聖樹と言われる樹木がヒンドゥーなどのインド諸宗教で使用されるため、それら仏典の記さない樹木がサーンチーで使用された可能性が残る。
- ⑪ 宮治昭 [1994] 「インド仏伝美術の三類型」『仏教芸術』217

図1
南門第1横梁背面
過去七仏

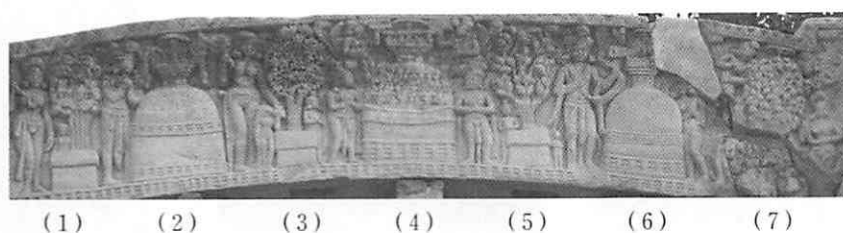


図2 西門第3横梁正面 象群による菩提樹供養



図3 東門南柱 ボードガヤー大精舎参拝(成道)



図4 北門第1横梁正面



図5 北門第2横梁正面 (1)



図6 北門第2横梁正面 (2)



図7 北門第2横梁正面
(3)



図8 北門第2横梁正面
(4)



図9 北門第2横梁正面
(5)



図10 北門第2横梁正面(6)



図11 北門第2横梁正面(7)



図12 西門南柱内側面
守門神(ヤクシャ)



図13 (3)
東門第1横梁正面

(4)

(5)



図14東門第1横梁背面
(1)



図15東門第1横梁背面
(2)



図16東門第1横梁背面
(3)



図17 (4)
東門第1横梁背面



図18 (5)
東門第1横梁背面



図19 (6)
東門第1横梁背面



図20 (7)
東門第1横梁背面



図21 (1)
西門第1横梁正面



図22 (3)
西門第1横梁正面



図23 (5)
西門第1横梁正面



図24 (7)
西門第1横梁正面